

(阿部敏高先生)

小論文は前半に行われます。今回は重箱の隅のようなところが出題されました。小論文であまり書くことができないと、その後に行われる口頭試問にも精神的な影響が出ます。どこを出題されても 1200 字は埋められるように治療指針を暗記し、鉛筆で字を書く練習をしました。

小論文テスト中に試験監督の先生が焦らせる言葉をかけて来ますが、あまり気になさらないでください。

後半に行われる口頭試問では、「なんでこのインプラントメーカーを使用したのか」などちょっと答えに窮するようなことも聞かれます。

この質問には治療指針のインプラント選択の基準と、そのインプラントメーカーの特徴を踏まえて回答しました。

多数歯欠損症例では、手術時年齢に関わる内容を聞かれました。具体的にはメンテナンスに通うことができなくなった場合の対応です。将来的には訪問診療で対応したり、オーバードンチャーに作り変えることをインフォームド・コンセントに盛り込んでいるなどと回答しました。私の場合には、さらに訪問診療での点数算定はどうするのかと突っ込んだ質問を受けました。その場では補綴にしても外科にしても各論を深く聞かれないように、総論的な回答を長く話せるよう心がけた方が良いように感じました。

全てにおいて、「治療指針にはこう書かれていて、自分はこのように考え、最終的にこれを選択した」と答えられるように練習すると良いと思います。

口頭試問は試験官の先生によって大きく左右される気がします。そして前半の小論文の結果は試験官の先生は知らされていないようです。

準備はもちろん大切ですが、あまり気負いすぎて固くならず、ダメなら来年また受ければ良いという気持ちで臨んだ方が、余裕を持って回答できるのかなと思います。

事前の iird 専門医試験対策研修会は、ぜひお受けになることをおすすめします。各先生方からの症例に対する実践的な質問は、自分 1 人では到底想定できないものです。研修会での頭が真っ白になる模擬体験は試験当日に生きてきますので、ぜひ指導を受けて下さい。

最後になりますが iird 専門医試験対策委員の先生、この度は本当にありがとうございました。今後も変わらぬご指導のほど、よろしく願いいたします。